

令和元年度第2回岡山市総合教育会議

日時：令和2年1月14日（火）

場所：市庁舎 第3会議室

午後3時31分 開会

○司会 失礼いたします。定刻となっておりますので、ただいまから令和元年度第2回岡山市総合教育会議を開催させていただきます。

本日は全員のご出席をいただいておりますので、会議は成立しております。

傍聴の希望がありますが、入室を許可してよろしいでしょうか。

○市長 よろしいですね。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○市長 はい、じゃあお願いします。

○司会 傍聴者の入室を許可します。

〔傍聴者入室〕

○司会 それでは、協議事項に移らせていただきます。

議事の進行は、招集権者であります市長にお願いしたいと存じます。市長、よろしくお願ひいたします。

○市長 はい。皆さん、まずは新年明けましておめでとうございます。今年度、多分最後になるんですかね。総合教育会議です。今日の議題、問題行動・不登校等の防止及びその解決ということですが、よろしくお願ひしたいと思います。

それでは、次第に沿って議事を進めます。

協議に先立ちまして、総合教育会議には今回が初めてのご出席となります河内教育委員が今日いらっしゃっております。一言ご挨拶をお願いしたいと思います。

○河内教育委員 はい、失礼いたします。10月8日付で藤原委員さんの後任として就任いたしました河内智美と申します。小学校現場を離れて5年近くがたっております。まさに今の現状や課題について皆様方からしっかり学ばせていただきながら議論に加えさせていただけたらというように思っております。どうぞよろしくお願ひいたします。

○市長 はい、これからよろしくお願ひいたします。

それでは、議事を進めます。

今回は、まず文部科学省の暴力行為・いじめ・不登校の調査結果を受け、岡山市における特色や現状の分析結果について報告していただき、それらを踏まえて課題や今後の方向性などについて議論し

ていきたいと思いをします。

前回に引き続き、岡山市中学校長会の藤原会長、そして小学校長会の徳永会長にご出席をいただいているほか、今回は富山中学の延原校長、平井小学校の高尾校長にもご出席をいただいております。4名の方には今後議論に入っていただきまして、学校現場における、さまざまな現状そして提案についてご発言をいただきたいというように思います。

まずは、延原さんと高尾さんは初めてのご出席ということで、自己紹介をお願いできればと思います。

○延原校長 岡山市立富山中学校校長を今、富山中学校では2年になりました。その前は前任校は妹尾中学校で3年、校長をやっております延原まどかと申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

○高尾校長 失礼します。岡山市立平井小学校の校長の高尾と申します。校長になって3年目でございます。まだまだひよっこでございますが、どうかよろしくお願ひいたします。

○市長 ひよっこどころか、もうベテランの域に達しているんじゃないかと思ひますので、さまざまな点、鋭いご指摘をよろしくお願ひ申し上げたいと思ひます。

それでは、教育長から、まず暴力行為・いじめ・不登校の調査結果について報告していただき、これらについてご出席の皆様からご意見をいただければと思ひます。

○教育長 はい、それでは失礼いたします。私のほうから本市の暴力行為・いじめ・不登校の状況について、ちょっと時間をいただきましてご説明をさせていただきます。

初めに、暴力行為についてであります。

資料1の1ページの中段の折れ線グラフをご覧ください。資料1の1ページでございます。

小学校ではこれまで増加傾向でありましたが、平成30年度は減少し、全国の発生件数を下回ることができました。これは校内での情報共有や外部機関との連携を進めてきたことで、学級担任が抱え込まず、学校全体での対応が進められてきた成果であると思われまひます。

一方、中学校では暴力行為がこれまで7年連続で減少してありましたが、平成30年度につきまひしては増加しました。特に生徒間暴力の件数が増えており、加害生徒の約半数は中学校1年生となっております。ただし、中学校では学年が上がるにつれて暴力行為は減少する傾向にございます。これは小学校から積み重ねてきた学級集団づくりや非行防止教室などによる規範意識向上の取組の成果であるとともに、子どもの成長により人間関係づくりのスキル向上ということが考えられると思われまひます。

次に、いじめにつきまひして、2ページをご覧ください。

小学校での認知件数は微増であり、過去最多の740件になりました。中学校では減少、平成28年度とほぼ同数の認知件数でありましたが、アンケートによるいじめの認知が減少してありまひました。また、いじめの解消率が平成29年度に大きく下がっているのは、いじめの解消の定義が変わり、いじめ

が少なくとも3カ月止まっていることと、本人、保護者の面談によって被害者が心身の苦痛を感じていないことの両方が必要とされたためであります。今後もいじめの解消につきましては、慎重に判断するよう学校に求めているところであります。

続いて、不登校について、3ページをご覧ください。

不登校の現状は、新たな不登校の増加、また90日以上欠席する児童・生徒の割合の高い状態が続いております。教育委員会は、これまで資料3の1から4ページ、「不登校これだけは！」を作成し、新たな不登校を生まない取組と長期化している不登校の取組を行ってまいりました。しかしながら、今回の調査結果を踏まえ、これらの取組を検証したところ、資料2の取組の検証にございますように、4点について課題があったと考えております。

1点目は、不登校の具体的な対策についてであります。教育委員会から不登校の未然防止の対策として幾つかの取組例は示していたものの、徹底ができていなかったことから、学校によって取組の視点や方法に差が生じている現状がございます。

2点目は、中学校区の小・中学校の連携についてであります。不登校傾向のある子どもや家庭へのかかわり方などにつきましては、中学校区の小・中学校で協議して対応するよう方向性を示しておりますが、現状は中学校区全体で連携がとれていた中学校区は約半分ではないかといった状況でございます。

3点目は、教育委員会が作成した啓発資料についてであります。資料3の5ページ、「子どもたちの健全育成に向けて」は、家庭だけでなく地域の方など、広く活用していただくために作成した資料であります。しかし、実際に学校でPTAや保護者、地域との協議に活用した割合は、小学校・中学校ともに十分と言えるものではございませんでした。

4点目は、適応指導教室の活用についてであります。長期化している不登校の児童・生徒が増加しているにもかかわらず、その対策としての適応指導教室の活用は十分ではございませんでした。

以上が課題として認識しているものでございます。

教育委員会としましては、取り組む内容を具体的でわかりやすい取組に改善し、全ての学校において取組が徹底されることが重要と考えております。そこで、不登校対策として効果が出ている幾つかの学校の取組を参考としながら焦点化した取組が資料にある今後の取組の4点であります。

まずは、具体的な不登校の未然防止対策として、各学校で原則、連続欠席3日間で家庭訪問をし、登校につながる働きかけをすることと、不登校が理由で年間欠席10日を超えた児童・生徒の支援計画を作成することの徹底を考えております。

次に、中学校区の小・中学校で児童・生徒の支援について年3回の協議の場を設け、連携を強化し、児童・生徒、保護者に対して歩調を合わせた取組を実践していくことを徹底したいと考えており

ます。

さらに、保護者や地域の方と子どもたちの健全育成について協議する場を設けるなど、学校とPTA、地域とのさらなる連携強化の徹底を図り、地域の力もお借りして支援が必要な家庭へかかわっていただきながら不登校の増加に歯止めをかけてまいりたいと考えております。

最後に、不登校が長期化している児童・生徒に対して、より多くの児童・生徒が適応指導教室で支援を受けられるよう、運用方針を見直したいと考えております。

教育委員会からの報告と説明は以上でございます。

○市長 はい、どうもありがとうございました。

特にこの不登校の未然防止については、具体的に何ができるのかということを確認にしようじゃないかと教育委員会との議論の中でこういったことが提案されたところでもあります。この提案だけでなく、暴力行為・いじめについても、どのような対策がこれから必要なのか、この場でも議論できればやっていきたいと思うんですが、まずは小学校長会または中学校長会に全体像を教えてください、全体について把握されている内容そして今後の動きについてお話しいただき、今日、個別に平井小学校と富山中学校の校長さん方が来られてますけれども、非常にいい取組をされている両校だというように聞いております。それぞれの取組についてお話をいただければというように思います。

各教育委員の皆さん方は、4人のお話を聞いてから全体についてご質問ないしは感想を述べていただきたいと思いますので、よろしく願いいたします。

では、小学校長会のほうからやりましょうか。

○徳永小学校長会長 はい、徳永です。お願いいたします。

まず、校長会として5つの区がありますが、区ごとに校長会の研修会を月1回しています。それぞれの区の中で、例えばこういうようにいじめに関する資料をあらかじめ校長会が始まるまでにもう配っていて、これについてどういような課題があって、どういようなところが問題だったかといったところを校長研修会でそういうような研修をまずそれぞれの区でやっております。

また、校長全員が集まる会、定例会も月1回ありますが、その中には生徒指導委員会という会があります。その生徒指導委員会のほうから、こういう不登校対策であるとかというところで、例えば好事例であったり、今こういうことで悩んでいるといったところを校長会の中でも情報を共有をしているところでもあります。

その校長会で情報を共有するときに、不登校の問題は保護者の育った環境や考え方などの影響にもよって保護者がひきこもりを、それによって子どもも引きこもるといような、そういう傾向もあるということで、学校はもちろん頑張るんですが、不登校問題はやはり家庭教育が大事ではないかなということで、今学校は専門機関、特に各区に福祉事務所があります。その中に地域こどもセンター、

そして子ども相談主事というのが配置されていますので、その子ども相談主事がそれぞれの学校に月1回のペースで来てくださいます。

そのときに本校の課題はこういう課題だということで管理職が話をしたり、直接今不登校気味な(児童の)担任が子ども相談主事と話をします。でも、これはもう家庭に問題があるとなれば、そこから先、家庭にはなかなか学校は踏み込むことができませんので、子ども相談主事がこども相談センターとまた相談しながら家庭環境の改善、それから保護者が子どもを学校に行かせようとする、そういう協力を得ようということで物すごくかかわってくれているので、これはもうこれからまさに学校と教育委員会とこの保健福祉局とそれから地域の民生委員、主任児童委員の皆さんがもうワンチームになって、オール岡山市としてやっていかないといけないなということを話しております。

最後に、小・中連携は結構できているんですが、小学校へ入学する前のお子さんの様子を小学校が保育園、幼稚園、認定こども園から情報をしっかりキャッチして、そして保護者の特性があるのならば、そういう保護者には福祉のほうから切り込んでいただくとかということで入学までにきちっとしていかないと、もう幼稚園でも不登校なんです。その子が小学校へ来たら、やはりそのまま継続するので、その義務教育の入り口のところの切り口をワンチーム、オール岡山市でやっていく必要があるんじゃないかなということを考えております。

以上です。

○市長 はい、ありがとうございます。

では、藤原さん、お願いいたします。

○藤原中学校長会長 失礼します。藤原です。

中学校の取組について簡単に現状とあわせてお話ししたいと思います。

中学校の校長会としましても、年度初めに教育大綱について各校確認をして、学力それから問題行動について具体的に取組もうということを通理理解をして取り組んでいます。部会として問題行動・不登校部会というのを設けておまして、そこで課題があれば共有をしながら、校長会の定例会でも話題にしながら取組を共有化しながら進めているところでございます。

中学校の生徒の現状とその取組については、先ほど小学校長会の徳永会長さんもおっしゃられたように、地域の地域こどもセンター、児童相談所、それから中学校の学警、学校警察連絡会であったり、民生委員さん等について連絡を取りながら情報共有しながら進めているところです。週1回、スクールカウンセラーもおいでになるので、生徒と保護者がうまいことつながればカウンセラーさんにつなげたり、それから教員がどういように対応したらいいのかなというところについては、カウンセラーさんに教員が相談をしながら、いろいろご指導をいただいているところであります。

それから、子ども相談主事の方は週1回、定例の生徒指導に関する会議においていただいているの

で、毎週情報交換をしながら、福祉としてはこうだよとか学校としてはこうですよという連絡を取りながらご指導を仰いだり、それから情報をいただいたり進めているところであります。

子どもたちの様子としては、小学校から長期欠席の生徒が多いという思いがあります。もちろん中学校になって新規というのがありますが、小・中の連携の中で五、六年、高学年はよかったんだけど低学年、中学年で不登校気味であったとか、家庭でいろいろあって小学校が対応していたんだ、五、六年は頑張っていたんだけど中学校になってというケースがあったり、支援学級に入っていたお子さんが中学校、進路のことを考えて通常学級に入る。小集団から急に大きい集団、中学校といったら何校かの小学校が合同になりますので、もう知らない人ばかりというような状況になって環境に対してなかなかもう入りづらくなってしまふ子どもさんもいたりして、そういうケースにちょっと長期化するのがあるのかなと最近、私は思っています。

それから、学力についても、なかなか身につけていないというところがあって、中学校の授業についていけなくなってくる。だんだん中学校1年生の今ぐらいから勉強がわからないと。もう座っているだけになっているケースもあるので、個別指導ができる場所であったり、それから今アクティブ・ラーニングというの学び合うという授業形態をしていますので、授業の中で孤立化させないように、みんなで授業づくりをしようなどというのを話しています。

それから、新たな課題としてというか、最近、やはりこういうケースが多いよなどというのが起立性調節障害、朝起きれない。それは怠けではなくて、本当にもう起きて体が動かないという……。

○市長 何障害ですか。

○藤原中学校長会長 起立性調節障害。病名というか、診断名がついて、思春期の子どもさんに多いようで、今までは朝起きれないのは怠けじゃないのかなと思っていたのが実は病気であるというか、診断名がつくとかというケースもあって、いろいろなケースというか、これまで経験していない、私ですけど、ケースもあって、個々の対応が必要になるんだろうなというように思っています。

小学校でもいろんなケース、いろんな機関と連携をしてくださって中学校にですが、連携をしながらでも、もう家庭に入ることはなかなか難しいので、学校の担任は入りやすいけども、そういう方が入るとなかなか入れないとか、担任もピンポンを鳴らすんだけど、なかなかもう出てきてくれないとかというケースもあって、家庭に入る入り方というのはなかなか難しいなど、学校だけではなかなか難しいなというところを今感じているところです。

それから、学校としても、子どもたちが育つ集団づくりというのは頑張っているつもりです。親和的な集団をつくろうと指導課がしてくださってるアセスを活用しての人間関係の課題を共有しながら取り組んでいたりとかしています。

それから最後に、先ほどの説明にもありましたけども、適応指導教室ですが、通室の人数を何十人

と書いてますけども、多分相談に行ってる子どもたちはもっといると思うんです。なので、通室に至るまでのというよりも、相談に行きやすい、適応指導教室という名前自体がもうそもそも違うのかなと。中学校はもう3年後には進路というか、社会に出す、義務教育が終了なので、そういう不登校、長期欠席ですけどというお子さんについては、社会で引きこもらないような、社会との接点も確実につくれるような取組をしていかないといけないのかなと最近思っています。その一つとして、適応指導教室がもっと行きやすい場所、かかわっていただきたい場所になっていただけると、不登校の数は減らないにしても社会に出るときにきっかけづくりになるのかなと思っています。

取りとめのない話になりましたけども、以上でございます。

○市長 はい、どうもありがとうございました。

それでは、小学校の高尾校長からまずお話しいただきます。

○高尾校長 はい、平井小学校、高尾でございます。

まず、不登校の要因とか原因とか本校の様子を見ながら少しお話をさせていただこうかなと思っています。

不登校と一言で言っても、いろいろ原因とかがあるかなと思っています。友人関係のトラブルですとか学業不振ですとか学校の先生が怖いとか学校のこの行事が嫌だとか、いろいろなことがあると思いますが、そういった学校に起因するものというのは学校で解決できるものかなというように思っています。そうでなくて、本人の問題、例えば本人の意欲にかかわるようなことですか、それから先ほどもありましたけども、病気がもしかしたら疑われるような場合、それから発達の障害といったものもあるかもしれませんし、家庭の無理解とか無関心、家庭での育ちといったような家庭に起因するものとか本人に起因するものというのがこれが割合からすると多いんではないかなと思いますし、対応に苦慮するのはこちらのほうのケースかなというように思っています。

原因も状態も十人十色だというように思いますし、同じ対応でも、Aさんにはこの対応をしてきてAさんはうまいこと学校復帰ができたけれども、Bさんに同じことをやっても決してうまいことかないといったところが対応の本当の難しさかなというように思っています。

平井小学校の場合というか、もうほとんどの学校ではこれをしているんだろうなと思いますが、早期発見と対応というのがやはり大切かなというように思っています。市教委の方針にある「3日休めば即対応しましょう」といったことについては、これはもう守ってやっています。欠席者には1日目であっても電話で様子を聞いています。その中で様子に変だなというのは担任の先生だったらわかるのかなというように思っていますし、そこから対応が始まることも多々あります。

それから、教頭先生だったり養護教諭であったり保護者への信頼というのが非常に大きな問題だと思っていて、担任に言えないことでもこういった教頭だとか養護教諭だとかだったら話がしやすいと

いったこともあるので、そういった方々、キーマンになる人がどのようにかかわっていくのか、その家庭の中にかかわっていくのかというのは一つのポイントかなというようにも思っています。

それから、これも本校の取組の一つですけれども、連絡がなくて学校に来ていないお子さんがいた場合は、うちは8時30分が始業ですけども、8時30分の段階で各教室から誰々君がまだ来ていません、誰々さんはまだ連絡が来てないでしょうかというようなことで連絡が職員室に集まってきます。集まった情報は職員室にいる職員で手分けをして各家庭に電話連絡を入れます。今どのような状況ですか、まだ学校のほうに来ていないんですけども、どんな様子ですかとか、直接本人が出れば、今もう御飯は食べたのかと到着がえたのかということをして、何時頃来れるかなというようなことで話をすることもありますし、そういうことで取りとめのない話の中から、じゃあ学校で待ってるからね、おいでよということをして地道に続けているということは、もしかすると功を奏している取組かもしれない。

それからもう一つは、これはマンパワーの話ですけども、不登校支援員さんの方がついています。不登校支援員さんの方は学校へ来れない子どもさんのところに家庭訪問に行ってくださいたりだとか、それから先ほどと同じように電話をかけてくださったりだとか、登校したんだけども教室に行くことがなかなか難しいといったようなお子さんの相手をしてくださったりとかということをしてくださっています。そういった不登校の支援の方のお力というのは、今の本校の場合では非常に大きいかなというように思います。こうした対応がなかったら、もっとひどい状態になっていたんじゃないかなと思います。

岡山市の不登校、全国も不登校が増えている、増えていると言ってるけれども、何も手だてがなかったら、もっとももっとひどい状態になっているんじゃないかなと思うんですが、こういったことを地道にしているから、増えているんだけども、ここで止まっているのかなと思います。平和だから何もないから人的な支援はしませんよとかというのではなくて、生徒指導上の問題がなくても、そういったようなマンパワーをしていただけるような配慮があると、学校としては助かるかなというように思っています。

それから、これから課題のことなんですけども、一つは小学校は担任の者が不登校について対応するケースが多いと思います。先ほどのように電話があつて職員室でも手分けをしますけれども、結局は担任が抱えて対応しています。本当は組織として、生徒指導の組織として生徒指導が動いていく、組織として動いていくことが大切なんですけれども、いかんせん小学校は教科担任制ではなくて学級担任制をとっているから、そういったところで生徒指導主事でさえ担任を持っているケースが多いのではないかなと思います。幸いなことに本校の場合は生徒指導主事は担任を持たずに生徒指導についてやってくれというようにお願いをしているので、そのところが動きやすいのかなと思っています。

ますけれども、そういった組織として動くということを考えていくことが一つ課題かなと思います。

もう一つ最後は、これはどうしようもないことかもしれませんが、学校は一生懸命手厚い対応をしていますが、果たしてこの手厚い対応というのはその子の将来のためになるのかなということには、ちょっと疑問があります。手厚くしていけば、たくましが失われてしまうのかなということも、ちょっと学校の校長としては危惧をしています。やはりたくましく、これからの世の中育っていくためには、いろいろな苦勞とか嫌なことにも立ち向かっていかなければいけなかったりとか乗り越えなければいけないような、そういった子どもたちもつくっていかなければいけないと思っています。そういった中で、どこまで手厚くしていけばいいのか、どこまで手を差し伸べていけばいいのかというのは、よくよく考えて対応していかなければ、子どもたちのこれからの成長には続いていかないのかなというようなことはと思っています。

ごめんなさい。私のほうは取りとめのない話になって申し訳ございません。

○市長 はい、ありがとうございます。

じゃあ、延原さん、お願いいたします。

○延原校長 はい。私のほうの学校は多分不登校の出現率が非常に減ったということで私のほうと呼ばれたというように聞いておりました。不登校の対策のために何をしたかということではなく、結局去年から今年はものすごく、私が2年、今、富山中学校にいますけれども、組織をすごく変えました。学校の組織を変えました。本校の場合は一小一中なので、よく言えばいい形で小・中連携がとれるけど、子どもたちの中では人間関係がもうそのまま孤立しちゃって、ずっと9年間、同じ人間関係で、しがらみがすごくあって苦しい思いをしているというようなことも、いろいろいいところと悪いところというのが見えてくるような学校というのに非常に私は気づいて、いろんな面で組織を変えようというように取り組みました。

大きく分けて、まず3つ、教員との結びつき、子どもとの教員の結びつきをしっかりしようというのをまず1つ方向性を出しました。2つ目は、子どもたちの表現力がもうちょっと足りないなと思っておりましたので、表現力をつけるような活動を取り組みましょうというようにしてきました。あとは、先ほど言ったように一小一中なので、小・中連携を少し具体的にやれたらなというような感じで、大体この3点を主軸にして今この2年目の後半を迎えております。

教員との結びつきのところは、今どんどん若手教員が入ってきましたので、もうごそっと組織を変えるために若手を担任にしました。年配の方をもう学年主任、学担という形で、本当に講師の人ももう教諭がいても担任という形で非常に強硬手段をとったところ、若い先生には子どもたちが行って非常にいい関係がつくれているというところが非常によかったなというように思っています。保護者のほうには、PTAの総会のときに、若手が担任になります、至らんとところもあるかもしれませんが、

それは家庭のほうでも教員を育ててください、子どもを育てるように教員を育ててくださいという形をお願いしていたせいか、多少失敗しても保護者のほうが非常に温かく若手教員を支えてくれるというところがあって、非常に家庭、子ども、教員のいい関係がくれたなというようには思っています。

それから、生徒の表現力のあたりは行事をかなり変えました。非常に子どもたちが自主的に活動できるということで、教員が余り出ないようにするために修学旅行なんかは全員実行委員会とかというような形で生徒が主体でつくらせたり、それから文化祭と体育祭もばらばらにせずの一つにして表現力をつけるような富山祭という形にしたりとか、いろんなところで今年度は行事の精選をされていております。非常にいろんなところで子どもたちの意見を吸い上げるような活動をしているところが非常によかったのではないかなというように思っています。

あと最後に、小・中連携のところは、せっかく一小一中なんだからということで、中学校の教員を昨年度からもう時間があいたら小学校に行かせてました。そうやっていると子どもたちも、あっ、中学校の先生という形で非常に顔見知りになって、別に何をやるわけではないんですけども、非常に中学校に入ってきてからが今年何かすごくいいつながりが持てて、中1ギャップがかなり解消されているのではないかなというようには思っています。今年は英語の授業にちょっとあいてる教員、英語の担当の者を行かせたりとか、それから6年生の集会に生徒指導の者が参加してちょっとしゃべってくるとか、またそういう地道なつながりなんですけれども、しょっちゅう中学校の教員が小学校に顔を出して小・中連携をさせるようにしております。

そういうところがいろんな問題行動も全然少なくなってまいりましたし、それから不登校がそこで激減してきているのかなど。絶対今年はテーマとしては「誇れる学校にしよう」ということで生徒と一緒に今取り組み始めておりますので、そういう不登校だけに特化したではなく、全体的な中での減少というところが本校の特色なのかなというようには思っております。

以上です。

○市長 はい、どうもありがとうございました。

4人のお話を聞かせていただいて、不登校の問題にしても、一体何のためにこの不登校の議論をしているのか、そして子どもをどう育てなければならないのかという何か本質の議論があって、初めて具体的にどうするのかということになってくるのかなというのはちょっと感じました。

まず、教育委員の皆さん方、ご自身のお考えを教えてくださいたいと思います。ご質問も結構でございますので、よろしくお願ひします。どなたからでも結構です。

石井さん、じゃあ。

○石井教育委員 失礼いたします。お話ありがとうございました。

まず、今回、不登校に焦点を絞ってこの総合教育会議をしていただくというのは、私は保護者でも

ありますけども、保護者としても市民の方もすごく関心が高まっているところで、ここに焦点を絞ってやっていただけというのは非常にありがたいことだなというように思っております。

ただ、通常の教育委員会の中ではこの不登校の数字が全国的に上がってきているという、このグラフだけを見ているものですから、現状がよくわからないところがあるんですけども、今、校長先生方のお話を通じて、さまざまな取組がなされているということが理解できましたし、それが直接的な取組ではなくて、さまざまな事前な環境整備というところにすごく注力されているんだなということがよく理解できました。

その中でも、皆さんがおっしゃった中で組織としてだとかチームというところ、あるいは学校とそれ以外とかサポートされる方との協業といいますか、その部分が一つ大事なキーワードなんだなということで理解をさせていただきましたというところと、あとは子どもを主体というところで、それがすごく効果があるというところと、あとたくましさというお話もされたので、そういう部分が大事なところなのかなということを知っていて思いました。

それでも、いい学校はそれでやられているので、それをいかにほかの学校でも広められていくか、あるいは学校以外の助けてくれる方に仲間に加わっていただくかというのが今後のテーマなのかなというようにも思いますけれども、とはいえ、今この3年間ぐらいグラフを見ていくと数字が上がっていつているので、この部分の原因のお話もたくさんされましたけども、一体この上がっていつているところの大きな要因を占めてるものは何なのかなというところが、これは全国的な傾向なので、是非国のほうでもそういう分析をしたものを市で共有できるような形を図っていただきたいなというように思ったのが一つと、それから一方で働き方改革を学校で進められていると思うんですけども、この不登校の取組をさらに強化してやろうということでやられると、さらに負担が増されていくんではないかなというようにも思っております、そのところで先生方へのサポートがより手厚くあるような状態があればいいなというように感じました。

以上です。

○市長 はい、ありがとうございました。

ほかにどうでしょうか。

じゃあ、片山さん。

○片山教育委員 失礼いたします。今日は貴重なお話をたくさんありがとうございました。私のほうからは保護者の視点という形で少しお話を述べさせていただきたいと思います。

私も小学生の子どもがおりまして、保護者の方といろいろお話をする機会があるんですけども、今先生方がこれだけいろんなことを尽力してくださっているということが本当に全体の保護者にわかっているんだろうかということをしごく感じます。こういう場で聞かせていただくと本当にいろんな

ことをしてくださっているのですが、私自身も仕事を持っている関係で、どうしてもPTAの役員等  
はもう一部の保護者の方にお任せっきりになっています。そこで、子どもの関係を通じて保護者の方  
とうまく関係をとれば、いろんな情報を伺うことができたり、中にはとっても積極的に働いている  
親に向けて、PTAの方がそういう働いている親に向けてメッセージを多数出してくださるところも  
あったりします。そうすると、学校の様子が非常によくわかります。

そのあたりで、先ほどのいろんなお話にもございましたけれども、家庭教育というのをもっともつ  
と学校の先生方にいろいろ教えていただいたり情報発信していただきながら、家庭の教育をもう少し  
見詰め直していけるような形の何か協働と申しますか、そういったことができたらいいいのではないか  
なというのを個人的には非常に感じます。

ある保護者の方のお話なんですけれども、お子さんが不登校になられて非常に悩んでおられて、担  
任の先生も非常に親身になっていろいろしてくださる中で、何が子どもを学校へ、今はもう短い期間  
で学校の復活を果たしておられるんですけれども、何が力になったかという、やはり保護者の方同  
士の連携で、学校の先生もいろいろ考えてくださってるんだけど、じゃあ保護者で何かできないか  
とか、じゃあ保護者の方が我が子に声をかけられることによって、お子さん自身がそれこそ一緒に学  
校に行こうよとか一緒に遊ぼうよ、まず休日とか時間外と一緒に遊ぶことから人間関係ができて、そ  
して学校に足が向くというようなことも聞いたりして、そうするとその連携をとられた保護者の方と  
担任の先生と学校とがうまくいってよかったねという思いを一緒に共有されることで、それがまた学  
校のほかの方々へも伝わっていくということで、何かとてもいい流れが雰囲気できたというような  
ことを聞いたことがあります。直接、私の子どもが行っている学校ではなくて、それこそ職場のママ  
友で聞いた話なんですけれども。

あともう一点、先ほどもありましたけれども、今学校だけでできることではないとおっしゃる中  
に、私はゲームとかスマホの問題というのはどこの家庭でもものすごく悩んでいます。保護者の方の  
中にも、職業的に私がちょっとかかわる保護者の方でも、このお正月のお休みの期間、もう一日中、  
画面を見ていると。それで、何が起こるかといったら、親子のけんかですよね。そんな中でも本当に  
親子がいつも角を突き合わせながら、本来だったら楽しい時間も持てただろうに、そのスマホとかゲ  
ームを介して結局家庭の中もぎすぎすしてしまうと。そして、外へ出て行って、ああ、もうさっさと  
学校が始まればいいのというようなこともおっしゃるんですね。

学校でもノーメディアデーとかってつくってくださるのは、すごく外から枠組みをはめていただく  
というのは、家庭の中ではもう親の言うことを聞いてくれないという現状がある中でノーメディアデ  
ーをつくってくださり、かつうちの子どもが行っている学校なんかは書面に丸つけをしたり、あと家  
庭からのメッセージを書かされたりということがあって、すみません、書かされたりになってしまっ

たんですけど、親にとっては大変な反面、子どもと一緒に話し合うし、どこか一つ褒めたいなという気持ちもあって、頑張ってやれたよねという、その関係づくりに、すごく家庭の中でそれをつくろうと思うと難しいんですけども、学校からそういうふうに枠組みをつくっていただくことによって、家庭内がスムーズにその話題に取り組めるということもあるのかなというように思います。

あるお母様の中には、ゲームをずっとやっていると興奮して夜寝れない。そうすると、そのゲームを攻略できないともう気になって寝れなくて、結局昼夜逆転みたいになっちゃって生活習慣もがたがたになると。保護者の方が何を言われても、もう布団の中に持ち込んでやっていると一言言われて、もう本当にどうしようもない。もう恨むのは、それこそそれをつくっているところかみたいな、そんな話題も保護者の中ではして、もうどうしようもないね。ただ、そうやって話せることによって、またそれを家で子どもと話せるわとか何かまた頑張れそうだとわという気持ちもあったりすることなので、何か学校でそれこそ集めてくださるPTAの懇談会だったり、クラスの懇談会とか、そういった場でも積極的に先生を中心にそういう話題を振っていただいて、あとクラス役員の方もいらっしゃるので、そんな愚痴を言える会が公的に、私的なママ友だけじゃなくて、クラス懇談会等をうまく活用していただきながら、そういう親の悩みを討論し合ったり何かいいアイデアを出し合ったり討論するだけでも大分違うかもしれないので、そういった核というか、コミュニケーションの核になる部分を学校が担っていただけたら、ありがたい保護者はたくさんいるんじゃないかなというように思います。

以上です。

○市長 はい、ありがとうございました。

片山先生のところも苦労されてます。

○片山教育委員 はい。うちは持たせないという主義で、トラブルが起きるので。

○市長 はい、どうもありがとうございます。

じゃあ、妹尾さん、はい。

○妹尾教育委員 貴重なお話をありがとうございました。石井委員、片山委員がおっしゃったところは、もう本当にそうだなと思うんですけども、私も今日先ほどお話を聞いて思い出したんですけど、うちの下の息子が中1の3学期のときに、たしか起立性調節障害になりまして、なかなか診断してくれる医師も少なく、当初はやはりメンタルを疑って、いじめられたりしてないかというんですけど、全然本人はそういうつもりがない。全くもう行きたいんだけど、行けない。そういう意味で不登校にもかなりいろんな原因、要因があって、さまざまなんだろうなというように思った次第です。

その上でなんですけれども、統計で見ると明らかに異常な伸びですよ。これは統計の取り方とい

うのではなしに、割かしこの不登校というのは機械的に定義づけられているので、実際にこういうようになっていくんだろうと思うんですけども、この間に子どものメンタリティーがそんなに激変するとも思えないですし、家庭環境が一変するという、そこまで変わるというものはないはずなのに、何でこんなに伸びてるのかなというのが正直な疑問で、どうしてもそこを結びつけていいのかどうなのかかわからないんですけども、メディアの変化というのがこの10年では大分変わっているんだろうなというようにはどうしても思っちゃいます。

起立性調節障害だった私の息子も今は高校生になってますけれども、本当にへばりついているんですよね、スマホに。生活のリズムというのも大分崩れちゃうこともありますし、そういうところも一つの要因にはなったりするのかなというようにどうしても思っちゃいます。

あと、さまざまな施策であるとか工夫を各校、各先生方が熱意を持ってされていると思うんですけども、それを保護者サイドで受けとめる力が、さっきの片山先生のご意見とも重なるんですけど、それを受けとめて一緒に協働して、今頃の言葉だとワンチームになって家庭も地域も学校もそういう受けとめができる態勢なのかなというところがちょっと難しいところがあるのかな。そういう意味では、教育というだけではなくて、全体の施策の中で取り組んでいかなきゃいけない課題なのかなというのを改めて今日お話をお聞きして感じました。

以上です。

○市長 はい、ありがとうございました。

では、河内委員さん、お願いします。

○河内教育委員 失礼します。いろいろな取組を紹介していただいて、ありがとうございました。SDGsの理念である「一人も取り残さない」というのを教育で考えたときに、今日議題で取り上げていただいている、さまざまな生きづらさを持っている子どもたちを一人も取り残さないという強い信念が教育者として大切なんだなということをいつも思っています。

特に不登校については、暴力行為とかいじめとか、虐待も含めて、もう非常に緊急性の高いものについては、もうすぐに対応しなきゃいけないということが迫られるので必ず最優先に対応するんですけども、不登校というのは明日しても明後日しても結果は同じということから、ついつい後回しになってしまうというところが大きいんじゃないかなと。だから、不登校が最優先課題だという教職員の意識づけというところがこれが一番重要なのではないかなと私は思っています。教員にそのことをこれが大事なんだよと伝えていくんですけども、その伝え方も、先ほどからお話にもありましたように、具体的に伝えていかないと、どのようにしたら最優先なのか、どうして不登校のそれぞれの子どもたちに向かっていけばいいのかということが教員はわからないんじゃないかなと。

それからもう一つ、さっきもありましたけれども、不登校になっている、おうちの保護者の方とい

うのは、どうしても学校不信の気持ちを持っておられる。その保護者といかにつながるか。普通は子どもを通じて保護者につながるというようなことをするんですが、いかんせん子どもは学校に来てない。学校に来てない子どもといかにつながっていくか。これはすっごい忍耐力と教師としてのすごい情熱が必要なんですよ。粘り強さ、そこを覚悟するというのがまずは不登校の子どもに向かっていくには大事なのかなということを感じました。だからこそ未然防止というのに力を注いでいかなきゃいけない。

先ほど延原先生のほうからお話があった、子どもと教員の結びつきというのがこれがすごく大事なのかなと。しかも、さらに言えば、子ども同士の結びつきというか、子ども同士がお互いにどういう対応をして支え合っていくかという、そのところが未然防止という点ではすごく大事なのかなということを感じながら先ほど聞かせていただきました。ありがとうございました。

○市長 はい、ありがとうございました。

私、幾つかの質問があるんですけど、質問でお答えをいただいたりした後にまたフリーで議論をさせていたきたいと思います。

教育論というのは、自分の息子、娘がどういう成長をしていったか、そして自分がどういう成長過程を過ごしたかによって随分変わるんだろうと思うんですけど、私はまず高尾さんがおっしゃったことの具体的な取組の中で、1日休んで誰からも連絡がないときに、しかるべき人から家庭に連絡すると。みんな行きたくないときってありますよね。私も今話を聞いて行きたくなかったときってあったなあというように思うんですけど、そのときにそれを一定の期間ずっと行かないとだんだん行きづらくなっていくんじゃないかと。それはそのとおりじゃないかと。一言連絡することによって随分状況って変わるんじゃないのかなというように思いました。

延原さんの話の中で、おおっと思ったのは、若い人、若い先生を担任にする。自分に身近ですよ。そうすると非常に子どもたちも話しやすいだろうし、雰囲気はよくなる可能性は相当高いんじゃないかなというように思ったんですね。そして、そういう取組ということ自体、ほかにもいろいろやられてて、幾つもやられてると思うんですが、校長会で月1回、小学校では研修会をやっていると、中学校でも不登校部会があるというお話をされたんですけども、こういういい取組というのをすぐに全校に波及させるのがいいかどうか。いろいろなことがあると思うんですけども、こういった皆さん方で議論し合ってよさそうだという取組というのを実験的に試験的に、例えば何校かでやってみるとか、そういう動きというのは小学校長会、中学校長会やられているんでしょうか。これが1点であります。

両方、校長会のほう、教えていただければと思います。

○徳永小学校長会長 各区で研修会したのを役員会で吸い上げるようにしています。役員会でまたそ

れを話し合っ、また全体会でこういうような事例があるというのを発表するような場面ももちろんあります。それから、生徒指導委員会の委員長が全体で話をするという場面があります。実は来年度から校長会の生徒指導委員会は研究テーマを「不登校対策」という研究テーマ一本に絞って、来年度はこれにとにかくもう全力でやっていこうということです、また是非これは来年度、取り組んだ成果をこういう場でお話をさせていただきたいと思います。

○市長 はい。

○藤原中学校長会長 失礼します。情報共有はしていますが、実験的にこれをしてみようとかというのはなかなか。共通理解の視点はなかなかそこまでは行けてないかもしれません。

○市長 まだ行けない。

○藤原中学校長会長 ただ、学校づくりという視点で、不登校対策ではなくて、学校づくり、それから学びづくりという部分では、先ほどもお話ししました学び合うということ、人間関係づくりをつくっていこうということについては、ある程度、共通理解をしながらそれぞれ学校で取り組んでいるかと思います。なので、不登校の取組でという部分については今こういう議論もありますし、それから大きな課題というご指摘もあるし、先ほども言いましたように、将来のひきこもりをつくらないという部分では大きく社会との接点をつくらないといけない中学校だと思いますので、課題として共通に持って来年度進めていけたらと思います。

○市長 はい、岡林さん、何かあります。教育委員会として、今いい取組に対して実験的、ないしは全体にもう少し波及させたほうがいいんじゃないかという点について。

○岡林教育次長 教育次長です。

それぞれ各学校がさまざまな取組を実態に合わせてやっていただいているというのは我々もだんだん聞こえてくるんですが、教育委員会としてやらなくてはいけないのは、そういったものをどんどん我々が吸い上げて、一般化して好事例として出していく。ただ、各学校、地域差がありますので、それが全ての学校で通用するというようなものではないと思いますので、複数のいろんな取組を紹介をして取り組んでいただいて、そして検証していくということは我々がしなくてはいけないことかなというのを今感じたところです。

○市長 今日、延原さんと高尾さんをお呼びいただいたのも、そういう意味があつての話だろうと思って。教育委員会自身の動き方については私も是とするものですが、どういうふうにこれを波及させていくのかということはまず重要な気がいたしました。これが1つ。

もう一つ、藤原さんがおっしゃった中で非常に感銘を受けたのは、適応指導教室を行きやすくすべきじゃないかということであるわけで、要するに中学校の教育って一体何なのか。場合によっては即社会に出る可能性もあるわけですから、そこで中学校時代を、例えば不登校になった場合、違う形で

子どもたちの社会との接点をできるだけ密なものにしてやると。こういったことって、すごい重要なことだと思うんですが、これは教育長になるのか、教育委員会の岡林さんたちになるのかあれですが、適応指導教室についての今後の方向性みたいなものをお考えがあれば。

○渡邊教育支援担当課長 教育支援担当課長です。

先ほどの教育長の話の中にもありましたが、適応指導教室の運用方針について見直していきたいということを考えております。まだこれをという具体的なところではないんですけども、一つは本人や保護者の意向を踏まえて、体験入室という形でできるだけ通室につなぐような形をとっていききたいということが1点と、それから通室する時間帯を少し柔軟にしていけるということができるんじゃないかというように考えているところです。

以上です。

○市長 要は適応指導教室へ行きやすくしようということですね、一言で言うと。

○渡邊教育支援担当課長 はい。

○市長 今の動きに対して何か藤原さんのほうでお話があれば。

○藤原中学校長会長 学校に行きにくい子どもたち、先ほどのようないろんな理由であります、特性があったりとか、あと時間帯であったりとか、それから本人の家庭の課題、それから学校に対する不信とか、さまざまあると思います。それはもう受けとめながら、では何遍も言うんですけど、どこか社会につながる場所をきちんと設定を。感覚的にはちょっと廊下の長い保健室が適応指導教室かなと私はありがたく思っていて、いつでも行ける。座布団がそこにある。体験入室とかというのではなくて、座布団があるからいつでも座っていいよというところで子どもたちがいろんな大人の方と自分との関係をつくってくれる。もちろん学校の担当が一番ですけど、それ以外にもたくさんつくることができる。保護者の方も学校には相談できないけども、適室の相談員の方とか市の方など、相談できる方っていっぱいいますので、いろんなところを学校に限らず、適応指導教室の方と連携をしながら居場所として座布団をいっぱいくれる場所になっていただけたらなという思いでいます。

はい、以上です。

○市長 はい、ありがとうございました。

何のために中学校があるのかということと同じようなものだと思うんですけども、ここの議論も一つ重要だろうと思います。

それからもう一つ、最後質問なんですけど、何人かの教育委員の先生がおっしゃった、先生たちのこういう動きを保護者がどう受けとめているのか。保護者サイドでの受けとめ方といいますか、そういう態勢づくりということになるんですかね。そういった点については、教育委員会ないしは校長の先生方、どんな感じでしょうか。何かどなたかでも結構ですが、保護者との接点づくりを今いろんな形

でやられてると思うんですけども、この点についてお話をいただければと思います。

○渡邊教育支援担当課長 教育支援担当課長です。

適応指導教室に相談にというお子さんについてですが、そういうお子さんについて今は子どもには直接、登校刺激を与えるのではなくて、エネルギーをためていく時期ですというような、そういう指導といいますか、助言をすることがあるんですけども、その際にも必ず保護者とつながっておいてくださいというような助言をしております。そういう形で私が以前勤めていた学校でも、子どもには直接は話ができなくても、保護者と週1回は必ず会って話をするとか、そういうようなことで学校との信頼関係を深めていく、そういうような取組をしている例がございます。

以上です。

○市長 　　というか、先ほど延原さんとか高尾さんがおっしゃったような話をどこまで保護者が知っているのか、保護者との共有がなされているのかということだろうと思うんですが、両校長さん、どうでしょうか。

○高尾校長 平井小学校です。

保護者がどこまで知っているかという、全ての人には知らないと思います。不登校に陥ってしまった保護者の方については学校が丁寧にかかわっていくので、例えば適応指導教室という存在自体も一般の人には知らないかもしれませんが、そういった不登校のお子さんには説明をします。ただ、それを受け入れるかどうかというのはまた違う問題で、もうそこまで構ってくれるなというような保護者も確かにいます。適応指導教室に多分小学校の子というのは少ないと思うんですけども、それは通う手段の問題だったりとか遠くにしかないとか、それから通うにしても保護者が送っていかなければいけないといった問題もあって、なかなか小学校には適応指導教室には足が向かないのだろうなというように思います。

ただ、こういった相談機関があるよとか学校にはスクールカウンセラーがいるんですよとか、そういった情報については保護者の方には話をしますし、そういった情報については学校だよりだとか、そういったことでもお伝えはしているところです。ただ、やはり温度差があると思います。それが本当に必要だと思っている保護者には物すごく有益な情報だと思いますし、そうではない方については他人事のような形なのかなというようには思います。

○延原校長 中学校のほうも必ず週1回はいろんな配布物とかというのは担任が届けていっております。保護者がどのぐらいそれを知っているかというのは、不登校の生徒については知らないというのが現実だと思っています。ただ、担任はなるべく保護者もしくはできるだけ子どもと顔が合えたら一番いいなということで、なかなか1年たっても顔を合わせない子どもさんもおられたりしますが、そういうときは必ず何かメッセージを伝えるという形をとらせています。そのうちにちょっとメモが戻

ってきたりとか細い糸でつながり始める場合があるので、そこを上手に逃さないようにという形では取組はしているのが今の現実かなというようには思っています。

○市長 はい、ありがとうございました。

どうでしょうか、再度のご意見、教育長も含めて、ご感想もいただければと思いますが。

○教育長 不登校のことについては、私はいつも教育委員会内でも、それから議会で答弁をするときも、問題行動等の中ではもう一番本当に真剣に取り組んでいかないといけない、全部真剣に取り組んでいるんですが、本当に重要視していることであります。

一つには、私は学校現場の出身ですが、不登校というのは、もう学校に行かない子がいるというのが私は許せないんですね。許せないというか、そんなに学校っておもしろくないのかなど。我々一生懸命やってきたけど、私自身は短い教諭の生活ですが、不登校は生んでないんですけども、学校をすごく責められてるような気がするんです。非常につらいというのが率直な意見で、だから早くいろんなことをして解決していきたいというのがございます。

今日いろんな取組のいい例が出てきましたし、ただそれなら市長さんもおっしゃいましたけど、ちゃんと情報共有して、どこの学校でもきちんと取組に対する対策ができていいのかと言え、まだ徹底できていない部分ってあるのかなというように思います。

それから、どの校長先生からも出ましたが、家庭の問題というのが非常に大きくて、今は昔と比べて時代が違いますから一概に言えませんが、親が子どもの背中を押す力というのは本当に弱くなっているんじゃないかなということも思います。したがって、学校はしっかり働きかけをしていかないとはいけませんけど、それは必要ですけど、不登校の数にしても、いろんな原因にしても、これだけのものがあるとしたら、私は教育委員会や学校の力というのは、ほんの一部は解決できるかもしれないけれども、この不登校を抜本的にと、また劇的に数を変えていこうとしたら、本当にオール岡山市で保健福祉のほうとか岡山っ子育成局とかというところ、またいろんな機関とつながって解決していかないといけないのじゃないかなということをお伺いして思いました。もう本当に一生懸命やっています。やっていますが、やはり一部だけかなど。

もう一つは、親になったときに、例えばおなかに子どもができたときでもいいです。それから、まさに赤ちゃんが生まれたときでもいいんですけど、保護者の務めって何かということをはとどこの場で教えてあげるといいますかね、そういうことが要るのかなというのがあって、私がまだ教育長ではなくて、普通の事務局員であったときに、よく保護者の方から電話がかかってきて、学校のこのやり方が気に入らんから学校へ行かさないんだみたいなことを平気で言われる保護者の方がいたんですね。これは違うだろうと。義務教育の義務って誰が負ってるものなのかということをお話をしっかり聞きますが、いつも怒りに満ちて聞いていたんですけども、そういったところも実はもしかしたら

保護者の多くの方が気づいていないんじゃないかなとか本当にそれをご存じなのかなということも時々思ったりします。

まだまだ教育委員会もやらんといけない。学校もやらないといけないことがたくさんあると思いますけども、そういったところにも力を入れていかないといけないんじゃないかなと。我々もそれについてしっかり他部局に働きかけをしていきたいなということも思います。

○市長 なかなかほかの意見を言いにくくなったかもしれませんが、何かあれば是非、もうちょっと時間がありますから、言っていただければと思います。

○河内教育委員 いいですか。

○市長 はい、どうぞ。

○河内教育委員 さっきオール岡山市民ということで保健福祉とかいろんな部局とも連携するという中の一つに、地域の方々のご協力というのが私の経験からするとすごく大きかったなということも思っています。毎日子どもが登校してくるのを見守ってくださる地域のお年寄りの方、それから何らかのことで学校の支援にかかわってくださっている方、そうした方がうちの近所の何々ちゃんがいつも家で泣いててとか、それからお母さんがいつも遅いから御飯が食べれてないから、そういうときはうちへ来て食べさせたりしてるんだわとか、そういうような方々の支えがあって随分子どもたちも支えられて大きくなっているなということを実感してきました。

ちょっと遅く来る子は迎えに行き行って連れてきてくださったりして地域の方が動いてくださるようになって、今岡山市が進めている地域協働学校というのが確実に深まって行って広がって行って、そういう姿が見えてきているんだなということを実感してるんだけど、まだまだ地域の方にお力を借りようと思うといっぱいそういうことができるのかなということを感じています。

以上です。

○市長 はい、ありがとうございました。

そのほか、はい、はい。

○石井教育委員 教育長のお話をお伺いして、確かに家庭力というか、家庭でのあり方を教育を受ける場というのは公の中ではなかったなというように思っていて、自分の親から教えてもらったりということはあるんでしょうけど、なかなかそれが少なくなっていっているし、いろんな考え方があって十分にそこが学べてない点があるんじゃないかなというように思ってます。

このお配りいただいている資料の「不登校これだけは！」の3ページの中でも、学校行事とかスポーツの記録会とかコンクールが一通り終わると例年この時期に不登校児童が急増しますということが書いてあるんですけども、そこでこれは私の一つの可能性として考えていることですが、親がそのとき子どもにどう接せられるかというのも非常に大きくあるんじゃないかなというように思ってます。

して、自分の子どもの存在を認めてあげたり、順位だけとか、そういうことじゃなくて、頑張ってる子どもの姿をきちっと応援できるということをより家庭でやっていく必要があるのではないかなというように感じました。

以上です。

○市長 はい、じゃあ片山さん。

○片山教育委員 いろいろありがとうございました。私がいろいろ今皆様のお話を伺って一番感じたのは、学校に行きたくないとか、それから学校に足が向かないというのは、一つには学校で自分が輝けるという自信がないのかな。生き生きできるとか好きなこととか友達でもいいし、別に勉強じゃなくてもいいかなど。そこで、さっき延原校長先生がおっしゃられた、自己表現ということをおっしゃったかと思うんですけども、やはり学校だとどうしても学力がないとちょっと肩身が狭いけれども、いろんな活躍の場、全員がチームでとおっしゃってたかと思うんですけども、何でもいいので、運動でもいい、何でもいい、何か輝けるとか自分が自信を持ってできることがあれば、かつそれが家庭ではなくて、社会の中で認めてもらえるということはすごく自信になって将来につながっていくのかなというように感じます。

昨今では非認知能力とかという言い方をして、頑張る力だとか興味・関心とか、そういう学力に直結しない、学力を支える、下支えになるような力も非常に重要だということに言われているかと思うんですけども、学力をつけるという気持ちになるというか、勉強して学力をつけようという気持ちになる以前に、自分に自信を持って輝ける場というのが学校の中にあり、そして家庭の中でもそれがまた認めてもらえる、そういう環境が子どもにとってあったらうれしいなという気を持ちました。

以上です。

○市長 お待たせしました、妹尾さん。

○妹尾教育委員 最後に感想めいた話で本当に恐縮なんですけど、私の狭い体験から申し上げます、私も保護者だったわけですが、長男を担当してくれてた先生が本当にもう圧倒的に信頼ができる本当にすばらしい先生だったんですけど、不登校に関してはいろんな複合的な要因があって、教育現場だけでは解決できない部分も大きいのかもしれないんですけど、さはさりながら教職員の先生の熱意であるとかスキルであるとか、そういうところに影響するところも大きいのかなというように思っています。

その先生は本当にプライベートなんかあるのかなみたいな感じでよくしてくださった先生なんですけれども、そういう意味で今後働き方改革との関係でどういうように接合していくのかなというのが非常に重要な課題なのかなというように思いました。

はい、以上です。

○市長 今、教育委員の方々からのお話がありましたけども、校長さん方ないしは教育委員会のほうで何かつけ加えることがあればお願いしたいと思いますけど。

はい、どうぞ。

○徳永小学校長会長 校長会会長じゃなくて、高島小学校の校長として今年度取り組んだこととお話しさせてください。4月の最初の職員会議で私がビジョンを示す中で、もう今年度は不登校をゼロにしようという宣言をする。その宣言をしたときに、それまでにちょうど1年ぐらい前から温めていた、こういう高島っ子賞、この小さいこれは担任が子どもに渡す、この大きな、これ、低学年と高学年バージョン、これはそれぞれ校長が渡すということで、要は児童の自己肯定感を高める。先ほど言われた、子どもたち一人一人みんないいところがあります。そのいいところを見つける目が教職員じゃないといけないと思うんです。

もうとにかく悪いところばかり指摘したら、もう学校へ行くのが楽しくないということで、1学期に1枚はとにかく全員に渡そうということと、この間も11日に土曜日にとんど祭りがありましたけど、そこへボランティアに来た子とか最後まで片づけをした子はもう校長から渡そうとかということで、とにかくこの高島っ子賞を創設を今年度して、そしてどんどん子どもたちに渡すという。先生方が渡している姿を見るのはとってもうれしいですし、校長は校内放送でお渡ししますけど、これは一つ何か今後も子どもたちにとっての魅力のある高島っ子賞になってほしいなと思います。

以上です。

○市長 はい、ありがとうございます。よろしいでしょうか。

そろそろ締めないといかんですが、私もちょっと妹尾さんに近いところがあるんですけど、実は4人の校長さん方が参加される前の話なんですけど、学力を上げていこうじゃないかと。全国47都道府県の中でもびりに近い岡山市、もちろん相対的な比較だけじゃないんですけども、これから世界に雄飛するためには一定の水準のものは持つとく必要があるんじゃないかということで、この総合教育会議でも議論をいたしました。その中で大きく幾つかの議論があった、その一つとして、先生だけじゃなかなかできないんだ、それは保護者の問題、地域の問題、いろいろかかわってくるんだという話があったんですね。それでも一定のレベルまで上げていこうじゃないかということで、ここで合意をしたんです。

私がすごいうれしかったのは、芥子山小学校に行ったときに校長室に入ったら、校長室でその総合教育会議での結論のペーパーが張られてたんです。これは今日張ったんですかと失礼な言い方じゃないんですけど、どうして張ってるんですかみたいな話をしたら、もうずっと張って、校長さん、またそれぞれの先生、みんな共有の一つの目標になってますという話をしていただいて、先生方が一つの方角に向いて動いていただいているなというのを実感したんですね。

もちろん先生だけでできないことは当然なんだろうけれども、先生の動きというのは必ず保護者には伝わる。そして、地域の方々にも伝わる。子どもたちにとって一つの中心的な存在なんじゃないかなというように思うんです。オール岡山はもちろんですね、いろんな部局が対応していかなきゃならないのはもちろんですけども、学校での出来事を先生がまずシステムをつくっていく、こういったことが必要なんじゃないかなというように思うんです。それで、そのシステムがどう機能したかというのを検証するというのも教育に携わる人間の責任なんじゃないかというように思うんですね。

今、富山と平井、中学校、小学校の校長さんからすばらしい取組をご説明を受けました。私はそれを全部に広めるのがいいのかどうかはよくわかりません。それは先生方、プロの間で十分議論していただいてやればいいと思うんですけども、一旦やり始めるとそれはみんな実行に移していただいて、そしてそれを検証する。これがどういう結果になっていくのかということを私はやっていただきたいなというように思うんです。オール岡山は結構です。それが必要であることもそのとおりだと思いますけど、決して先生の役割というのは小さくはないということだろうと思います。

とりあえずは、今日、教育委員会とお話をした中に1つ、連続欠席3日で家庭訪問する。登校につながる働きかけをする。年間欠席が10日以上生徒について個別の支援計画を作成する。これを新たにこのシステムをつくっていただきました。私はこれをよく判断していただいたと思うんですが、これを今度具体的に実行して、これでどのように変わったのか。先ほど延原校長がおっしゃったように、自分たちはこれをやって大幅に減らした。それが全部に適用されないのはそうかもしれない。だけど、最低、教育委員会として全部に適用できるものはこれだという整理をしていただいたんで、これについては是非ミニマムを実行して検証していただきたい。

それで、両校長会の方々には今のような立派な取組、それが適用できるようなものはどこなのか。オール岡山市内の中学校、小学校ではできなくても、やれるところがどこなのか。それを実行するとどうなっていくのか。そういったことも考えていただければなというように思います。私がこんなことをしゃべって5時になっちゃったというところもあるんですが、よろしいでしょうか。

教育長、いいですか。

○教育長 ありがとうございます。

○市長 じゃあ、そういうことで、今日は、でもすばらしいお話をお伺いすることができまして、本当にありがとうございます。これからも教育委員の皆さん方とともに、校長さん方、よろしく願います。今日はありがとうございました。

○司会 ありがとうございます。次回の会議につきましては、改めて通知をさせていただきます。

以上で令和元年度第2回総合教育会議を閉会いたします。大変お疲れさまでした。ありがとうございました。

午後 4 時58分 閉会